



京都の公立高校に進学を希望するみなさんへ

今号から、公立高校の選抜制度について、改めて学習・確認していきたいと思います。保護者の皆様もお読み下さい。とりわけ、他府県ご出身の保護者の皆様は是非お読みいただき、ご質問等があれば、直接進路担当または担任の先生までお願いします。お電話等のお時間がございませんでしたら、メモ等を生徒を通じてこちらにいただければ、お答え致します。

さて、京都府の公立高校は、平成26年度入学者選抜より、京都市・乙訓通学圏の公立高等学校普通科は、全て単独選抜になり、みなさんの令和6年度選抜で、11年目となりました。

君たちにとっては、中学校1年生の時から「単独選抜」なので、それが「当たり前」だと思っている人が多いと思いますが、**みなさんのご両親が京都市出身者であれば「公立高校は総合選抜」「近くの高校に進学する」というイメージを持っている方が多いと思います。また、他府県のご出身であれば、公立高校は学区制で、その学区の中で公立高校の所謂ランク分けがされているというのが多かったのではないのでしょうか。現在の京都府では、みなさんは長岡京市在住なので、「公立高校普通科」については、京都市・向日市・長岡京市にある高校のみ受検が可能、普通科以外であれば京都市・乙訓地域以外の高校（一定制限あり）に受検が可能です。**

選抜制度の違い-「総合選抜」と「単独選抜」について

最大の違いは「合格、不合格」の決定方法です。「単独選抜」はそれぞれの高校が合否を決めます。受験生が多く集まる高校では競争倍率が高くなり、合否の判定値は高くなる傾向があるし、逆の場合も考えられます。今回で12年目ですので、その傾向は、より明確になってきています。

それに対して「総合選抜」では、通学圏全体で「合格・不合格」が決められていました。以前、京都市・乙訓地域を東西南北の4つに分けていた時代があり、西京区と乙訓は、「西通学圏」と言われていました。その後、南北の2つに分けられていた時代があり、乙訓地域は南区・伏見区とともに「南通学圏」と言われていました。通学圏全体で合格者を確定してから、それぞれの生徒が進学する高校を決定していました。また、その中で「バス停方式」と言って、自宅から最寄りのバス停を願書に記入し、そのことにより進学校が決定されていました。

「総合選抜」と「単独選抜」のメリット・デメリットについて

「単独選抜」の利点について、京都府教育委員会は、受験生が自分の進学したい高校を選ぶとしています。しかし、一方で、実際には受検する高校によっては、不合格になるリスクは、「総合選抜」に比べて高くなります。

例えば、令和6年度中期選抜（単独選抜）で、京都府立鴨祈高校普通科は、168名の定員に対する志願者数が265名で、倍率は1.58倍でした。鴨祈高校を紹介したのは、昨年度京都市乙訓地域公立高校普通科中期選抜で最も高倍率だったからです。

しかし一方で、**平成25年度**一般選抜（総合選抜）の京都市南通学圏（長岡京市が含まれていた）では、普通科Ⅰ類の定員1458名に対する志願者が1573名なので、倍率は1.07倍でした。総合選抜であれば、入学する高校がどこになるかは別として、公立高校普通科に合格する可能性は非常に高いということが分かります。

現在の京都府の公立高校選抜制度について

では、現在の京都府の公立高校選抜制度の注意点について、次の三点にしばって、整理したいと思います。

その第一は、公立高校は、現在高校毎に難易度が違います。したがって、選び方によって合否が変わる場合もあるということです。ですから、第2順位に第1順位より難易度の高い高校を記入しても合格の可能性は相当低いことになります。但し、現時点では、合格可能性がある高校を選ぶのではなく、自分の入学したい高校を選ぶ事が最も大切なのは言うまでもありません。同時に、公立各校の志願者の集まり具合は、年度によって変動があります。去年の数字だけを見て判断しないようにしてください。

第二に、公立高校の受検結果によっては、**第1希望校以外の高校に進学することを、現実味を持って考える必要があります。**公立高校中期選抜は、3つの高校を希望することができます。具体的には、願書に記入しますが、第2順位に割り当てられる定員は多くありません。また、第2希望は、第1順位と第2順位の判定でもなお、定員が満たされていない場合のみ合否判定が行われます。第2順位や第2希望を記入する際、その高校に進学することになるということも念頭に入れて、記入する必要があります。また一方で、京都府独自の「私立高校あんしん修学支援制度」もありますので、人によっては、第2順位の公立高校よりも私立併願校の方に「進学したい」というケースも年々多くなっています。その場合は、第2順位も第2希望も記入する必要はなくなります。

つまり、「総合選抜」から「単独選抜」に変わったことで、以前より「第2順位高校の選択」及び「私立高校の併願校選び」が大切になっているのです。ですから、特に併願受験をする私立高校を（その高校に進学することもあるという視点で）しっかり選び、合格しておけば、「安心して自分の希望する公立高校に挑戦でき、万が一のことがあっても、確実に高校生になれる」ということです。だから、私立併願校は、確実に合格でき、「そこに進学する事になっても、しっかり頑張れる」高校を選ぶべきでしょう。

もし併願校を受験しなかったり、受験しても不合格になったりすれば、公立中期選抜での結果次第では、非常に厳しい状況になります。

第三に、毎年、私立高校を併願せず、公立中期選抜のみ受検する人がいます。2月末には「併願しておけば良かった・・・」と言っている人も中にはいました。なぜなら、ここ数年の状況で言えば、2月末の時点で、クラスの半数以上が、私立専願や前期選抜で進学校を決定しています。併願校を受験しないで、中期選抜で不合格になると大変です。公立高校中期選抜の合格発表は3月18日ですが、その時点での進路の選択肢は、ごく限られたものになります。

以上のように、進路希望の決定では、第1希望校はもちろん、第2、第3希望も真剣に考えなければなりません。ただし、併願受験ができるのは私立高校です。（公立高校に併願はありません）私立高校の場合、受験料も授業料も公立高校に比べて高額です。私立高校に進学することになれば、保護者が負担する「学費」は公立高校に進学するより重くなります。だから、自分一人で考えるのではなく、保護者とも十分に相談し、お互いの理解と合意を固めておくことが必要です。